

映像化される中世—語り継がれる史実とフィクション—  
Medievalism on Screen: Depictions of Fact and Imagination

日時：2017年6月4日（日）11:00~16:30

会場：首都大学東京（南大沢キャンパス6号館110講義室）

趣旨説明（11:00~11:10）

図師宣忠（近畿大学）

Nobutada ZUSHI

ヘイドン・ホワイトが「歴史記述」historiography に対比して「歴史映写」historiophoty という言葉を提起してからおよそ30年がたつ。その間、歴史と映画のかかわりについて数多くの文献が出され、「歴史映画」historical film / history film に関する議論も活発になされてきた。歴史映画はどのように過去を再現するのか。また、歴史映画はそれが生み出された時代をどのように反映しているのか。本シンポジウムでは、映画研究や中世主義研究も視野に収めながら、西洋中世研究の立場からこうした問いを引き受け、映画という映像メディアが「中世」をいかに語りうるか（表現しうるか）という問題に切り込んでみたい。

私たちは、西洋中世にまつわる映画を「中世映画」medieval film / film of medievalism として幅をもって捉えることにした。歴史の映画的な書き方を考えてみると、史実に基づいている作品ですら多分にフィクショナルなものとして受け止められうるし、フィクションの作品の中にきわめて歴史的な要素が見出せることも多々あるからである。中世映画に描かれる世界は、西洋中世学の研究者が明らかにする過去とどこが、どのように異なっているだろうか。中世映画には中世世界がいかに映し出されるのだろうか。

さらに本シンポジウムでは、過去の現実をどのように明らかにするかという問題を超えて、動作・音声・色彩をともなう映像メディアが現代世界を生きる私たち自身の中世理解にどのような影響を及ぼしてきた／いるのかについても追究してみたい。いまやすでに一世紀を超える歴史をもつ映画というメディアに描き出されてきた西洋中世を、私たちはいかに理解／誤解し、想像／創造しながら現代文化の一部として取り込んできたか。中世映画を通して現代社会の中世観を探り、中世映画の可能性を模索したい。そうすることで、西洋中世学の各ディシプリン特有の「中世」との距離の測り方も垣間見えてくるのではないだろうか。

## 第1報告 (11:10~11:40)

帰還せざる王、所在なき英雄—映画におけるロビン・フッドと十字軍の表象—

岡田尚文 (学習院大学)

The Cinematic Representation of Robin Hood and the Crusades:  
Kings Never Coming Back and Heroes Having No Home  
Naobumi OKADA

ハリウッド映画はロビン・フッド物語（とその背後にある十字軍遠征譚）をどのように視覚的に表象してきたのだろうか。本報告では、主に映画研究の成果をもとに、その変遷をたどりたい。

大雑把にいうなら、1920年代から30年代のハリウッド映画作品——スワッシュバックラー(剣劇)の傑作たる『ロビン・フッド (Robin Hood)』(アラン・ドワン監督、1922年)や『ロビンフッドの冒険 (The Adventures of Robin Hood)』(M・カーティス/W・キーリー監督、1938年)——において、大セットによって再現された中世世界を若々しく縦横無尽に駆け回っていたロビンは、1976年の『ロビンとマリアン (Robin and Marian)』(リチャード・レスター監督、1976年)を分水嶺として、現実の大風景のなかに投げ出され、年若い、活力と居場所を失っていくかに見える。

映画会社の枠組みを超えたところで間テクスト的に生じるかかる変化を、まずは物語の水準で検証する。その際、かつて物語の終盤で十字軍遠征から舞い戻り、森に住まうアウトローとしてのロビンを公認する役割を果たしていたイングランド王(リチャード獅子心王)が、『ロビンとマリアン』以降、俗悪な人間として描かれるようになり、かつ帰還しなくなるところに注目する。

次いで、このような変化の背景に、映画が作られた当時の社会情勢があることを確認する。十字軍とこれを先導する王がロビン・フッド映画において神聖視されなくなるのには、アメリカがベトナム戦争に敗北したことと、その結果として中世世界が社会的理想像として機能しなくなったことが関係していると考えられる。

第三に、この変化の映画史的背景を検証する。ロビン・フッド映画は、一時期、保守的な勧善懲悪譚を物語る映画ジャンルたるスワッシュバックラーの一大サブ・ジャンル(ないしサイクル)を形成したが、その1970年代後半における衰退は、映画の制度的・技術的变化(スタジオ・システムの崩壊、カラー化、ワイドスクリーン化等)とも無縁ではなかった。

ハリウッド映画が西洋中世像の常なる「語り直し」を行ってきた最先端のメディアであることを以上の検証を通して明らかにし、より包括的な議論へと開きたい。

## 第2報告 (11:40~12:10)

Handsome Handling of Handseax in Hobbit Films: 古英語的ファンタジーの武器の扱い

伊藤盡 (信州大学)

Handsome Handling of Handseax in Hobbit Films:  
The Anglo-Saxon English Styles of Steel in Fantasy  
Tsukusu ITO

映画の中に描かれた中世文化の受容に関する本論考では、ケース・スタディの一つとして J. R. R. Tolkien 原作の *The Lord of the Rings* ならびに *The Hobbit* の映画に現れた「武器」の描かれ方、また登場人物たちの武器の扱い方を取り上げる。厳密には「太古に展開するファンタジー世界」を描く設定を持つ本作だが、中世英語英文学研究者だった Tolkien が描いた原作には古英語時代の

世界を解釈した描写があるため、その原作に基づく映画版も中世世界を描いたものと捉える。

この映画シリーズでは、超自然的存在エルフの名匠が鍛造した剣は、超自然的怪物バルログや竜と戦うための優れた武器として描かれている。一方、敵方のオークが扱う武器も大量生産の製造過程が映画の中で敢えて描かれている。そのような映像メッセージが何を伝えるかを、中世英文学、中世北欧文学の原典との比較から考える。原典と比較すると、トールキンの創造した「ファンタジー」は西洋中世世界を解釈したものに他ならない。また映像でも様々なレベルで原作の持つ中世世界観を踏襲していることが見えてくる。その一方で、原作には描かれない「戦略」的な動きも映像には示されている。中世ヨーロッパの人々が思い描いた想像だけでなく、古代から中世にかけて行われた「戦」のリアリズムをも取り入れることで、西欧文化の中に生きる現代の視聴者に「中世世界の再現」を観ていると錯覚を起こさせ、彼らの持つ無意識の記憶に訴えるような一種の催眠効果を生んでいると論じる。翻って、映画『ホビット』が世界の中で日本でだけ興行収入が芳しくなかったのは、このようなリアリズムが、単なるファンタスティックな演出としか観客には感じられなかったからではないかと推測する。西洋古代、西洋中世を日本人が教養として当たり前のように知らないかぎり、このような催眠効果は得られず、理解の隔たりも続くものと思われる。

### 第3 報告 (13:30~14:00)

“It's Only a Model”：『モンティ・パイソン・アンド・ホーリー・グレイル』と中世写本

小宮真樹子 (近畿大学)

“It's Only a Model”: Medieval Manuscripts in *Monty Python and the Holy Grail*

Makiko KOMIYA

本発表は、映画『モンティ・パイソン・アンド・ホーリー・グレイル』(1974年)における中世の描写を、特に写本の扱いを通じて分析する。

英国のコメディ集団モンティ・パイソンは、アーサー王の聖杯探求を映画化するにあたり「本物らしく見せる」という予想を鮮やかに裏切った。代わりに彼らは、過去を理解するにあたって現代の価値観からは逃れられないこと、歴史映画といえども所詮は作り物であることを繰り返す。それを最も顕著に表しているのが、アニメーターのテリー・ギリアム扮する従者パッツィの発言であろう。王都キャメロットに到着し、目を輝かせる円卓の騎士たちに対してパッツィはシニカルに言い放つ。「あれはただの模型だ (It's only a model)。」

だが、自らの作品を現代のフィクションであると公言する一方で、パイソンズは過去に対する敬意も併せ持っている。監督のテリー・ジョーンズはコメディアンであると同時に歴史研究者でもある。そしてキャメロットの外観には模型を用いながらも、他の多くの場面を実在する城塞で撮影しているのだ。

このように、虚実相半ばする『モンティ・パイソン・アンド・ホーリー・グレイル』においてひときわ興味深いのが、ギリアムにより生み出されたアニメーションである。木にぶら下がる女性の頭部やオルガンを奏でる天使といった架空の生き物が登場するが、これらのイメージは中世写本の挿絵を精巧に反映している。

もちろんアニメーションの技術は中世において存在しなかったが、ギリアムの映像は写本のマージナリアの流れを汲むものである。本物ではなく、あくまで「真似て作ったもの」(モデル)だと自認しているものの、『モンティ・パイソン・アンド・ホーリー・グレイル』は中世を映像化するうえでのひとつの模範(モデル)と呼べる映画なのである。

#### 第4報告 (14:00~14:30)

##### 過去を語る—女教皇ヨハンナ伝説と映画—

藤崎衛 (茨城大学)

Regarding the Past: the Legend and Films of Pope Joan

Mamoru FUJISAKI

9世紀に女性でありながら教皇の座に就いたとされる「女教皇」についての伝説は13世紀のヨーロッパで誕生し、広範に流布した。この伝説は中世だけでなく近世から今世紀に至るまで受け継がれ、小説や演劇、ときに絵画などさまざまな手段で表現されてきたが——日本でも塩野七生氏によって小説化された——、その過程で伝説は初期のものに比べて情報量を膨らませ、またその内容と扱い方は時代ごとに変化を蒙ってきた。映画もまた表現手段の一つであり、1972年と2009年に欧米で映画化されている。

後者の映画はドイツを中心に製作され、大いに人気を博した。ドイツでは現在でもミュージカルで上演され続けており、この興業的成功は映画のヒットのおかげである。どうやら人びとが女教皇の物語を欲し続けていることはまず間違いない。とすると、作り手と受け取り手の双方がどのような理由で女教皇を欲しているのかが問われなければならない。

女教皇の映画は史実にもとづくものではなく、伝説というフィクションにもとづいている。「歴史映画」は史実に忠実かどうかということが大きな問題となるが、「歴史フィクション映画」においては——史実か虚構かとか、伝説を忠実に描いているかどうかといった問題もさしあたり無関心ではいられないが——むしろ中世の伝説に込められたメッセージを現代人がいかに読み取るのかが問題となるように思われる。本報告は、映画に備わる芸術、娯楽、政治的メッセージの諸側面に目を配りつつ、以上の点について考察する。

中世の人びとが伝説をどのように語り、解釈し、利用したかは、現代のわれわれが女教皇の映画をどのように受け止めるかという態度と重なる。また、13世紀の年代記作者や説教師たちが女教皇の存在を9世紀にさかのぼって設定し、読み手や聞き手が自ら受け取った情報をもとに過去を想像した行為は、現代のわれわれが遡及的眼差しのもとに中世の物語を再生産し、それを消費する行為と重なる。